

関東学院 学院史資料室 ニュース・レター

No.8
2006.6

目次

学院史資料室写真集 7	1
関東学院の中での小学校のあゆみ	2
学院史資料の紹介	9
資料・情報提供のお願い	10
編集後記	10



学院史資料室写真集 7・旧村井家葉山別荘（後の葉山学寮）

神奈川県三浦郡葉山町に村井貞之助氏^①の別荘として明治末期（推定）に建てられた写真建物は、太平洋戦争当時に日本海軍に接収されたが、終戦後の1948（昭和23）年、地元有志の尽力によりキリスト教主義の紫苑学園が創設され、その施設となった。紫苑学園は後に啓佑学園と形を改め、1956（昭和31）年には関東学院と合併するに至った。^② 1965（昭和40）年に関東学院葉山小学校が廃校となった後は関東学院の葉山学寮として利用されていたこの建物も、1977（昭和52）年に解体された。

（参考資料）

- ・関東学院大学工学部 研究報告 第22巻 第1号 「『旧村井家葉山別荘』調査報告」
- ・関東学院大学30年の歩み
- ・関東学院百年史

① タバコ王として有名な村井吉兵衛氏の義弟。

② 合併後、関東学院葉山中学校、関東学院葉山小学校、関東学院葉山幼稚園となるが、中学校と幼稚園は間もなく廃止となり、小学校のみ存続した。

関東学院の中での小学校の歩み



関東学院六浦小学校の歩み

関東学院六浦小学校校長

島田 正敏

1949（昭和24）年私立関東学院小学校として設立された。創立の前年、関東学院教会がキリスト教による幼児教育の理想を掲げて、幼稚園を設立したが、その翌年の卒業園児の保護者の要望により本校が誕生した。最初の入学者は25名で、クラス名は「イサク」であった。

1952（昭和27）年度 校名が関東学院六浦小学校にかわった。坂田祐校長が神奈川文化賞を受賞、4年生全員が祝賀会に出席した。第1回の自然学校が箱根町の冠峰楼で3、4年生により実施された。日本がまだ貧しい時代に宿泊行事を始めたのは、画期的なことだと言える。

.....

自然学校の目標として次のように記録されている。「おおよそ少年少女の小学生時代において、誘惑と危険の最も多く伴う季節は、1年を通じて夏季7、8月の頃ではなかろうか。おそらく夏季は、天候の関係と都市生活の繁雑および生理的関係から、とかく身体が惰弱になり、活動力が乏しくなり、万事に倦みやすく、あるいは病に侵されやすく、いろいろな誘惑が精神的に少年少女の弱点に食い込むのである。このような誘惑と危険から、少年少女を未然に救い、そのことに処して少年少女を自ら回避させうる能力を育成するためにも、この自然学校は学校生活において、もっとも重要な行事の一つである。大自然の中に溶け込んで、万物の創造主である神の摂理と偉大な愛を感じ得する事によって、児童がその幼い時代に、人生の正しい道、真理に従った生活の喜びを知る。これが自然学校の最終目的である。」現在も自然学校は行われている。

1953（昭和28）年度 第二回自然学校が実施された。3年伊豆、吉奈温泉「東府屋」。4、5年長野県、蓼科温泉「山

紫閣」。

1958（昭和33）年度 新校舎が完成した。ガスストーブが入り「教室はポカポカ楽しい勉強」と毎日新聞で全国に報道された。

1959（昭和34）年度 NHKテレビで理科放送に出た。東洋加工の爆発事件で全校生が避難した。

1962（昭和37）年度 校長に下平千太郎先生が就任した。

1963（昭和38）年度 本館が完成した。学校新聞「子どもかんらん」が全国コンクールに入賞した。合唱団が作られた。

1964（昭和39）年度 創立15周年記念式が行われた。オリンピックで使用された旗ざおが、屋上と運動場に立てられた。バス代が10円に値上げされた。

1965（昭和40）年度 関東学院葉山小学校が閉校した。児童は三春台と六浦に移動した。

1970（昭和45）年度 ハンソン山が削り取られ、縄文時代の土器が発掘された。

1973（昭和48）年度 「子どもかんらん」が朝日小学生新聞で努力賞を受賞した。

1975（昭和50）年度 「子どもかんらん」が新聞コンクールで全国入賞した。

1978（昭和53）年度 校長に柳生直行先生が就任した。新校舎が竣工、献堂式を行った。

1979（昭和54）年度 校長に佐々木敏郎先生が



達磨山にて（修学旅行）

1959（昭和34）年



マラソン大会（昔の夕照橋） 1955（昭和30）年頃

就任した。小学校の隣に関東学院幼稚園が引っ越してきた。創立30周年記念式典が、六浦中高の礼拝堂で行われた。

1984（昭和59）年度 関東学院創立100周年記念式典が釜利谷校地で行われた。

1989（平成元）年度 礼拝堂と体育館の工事が始まった。

1990（平成2）年度 礼拝堂、体育館が完成し献堂式を行った。「40周年記念誌」を発行した。

1995（平成7）年度 校長に所澤保孝先生が就任した。

1999（平成11）年度 1号館が完成した。献堂式が行われた。創立50周年記念式を行った。

2001（平成13）年度 校長に森島牧人先生が就任した。校内に無線LANが設置された。六浦小学校ホームページを作成した。

2002（平成14）年度 マルチメディア教室設置。児童議会の中にチバレ委員会を設置した。全館空調が完備した。セキュリティ強化のため正門、西門に警備員を配備した。

2002（平成14）年夏、第一回タイ訪問団がティワタ村を訪ねた。

.....

タイの古都チェンマイから南西に300キロ。車で約6時間走った山岳地に少数民族のカレン族が住むチバレ地方がある。約40の村が点在し、カレン語を話す人々が高床式住居で暮らしている。学校は中心部のティワタ村にしかない。学校まで歩いて2日かかる子どももいるため、その多くが学校に通えない。1992（平成4）年、カレンバプテスト同盟の牧師であるダウ先生が、寮を建てた。しかし現金収入の少ないこの地方での運営は困難な状況になった。チェンマイ在住の日本バプ

テスト同盟宣教師の大里英二先生から連絡があり、1994（平成6）年から本校の支援活動が始まった。10年目の2003年、児童、ぶどうの会、卒業生等の献金により新しい女子寮を一棟建てることができた。5年の権田雄大君、4年の勘田ひかるさん、片岡由布子さんとそれぞれのお父様が献堂式に出席して交流を深めた。

このことは、毎日新聞の全国版に「寮建設で子供たちの絆」と報道された。また毎日小学生新聞に「学校に行きたい」と3回連載で記事になった。



寮の献堂式 2003（平成15）年8月

2003（平成15）年度 全学年で英語の授業を行う。第1回アメリカン・キャンプ（八王子セミナーハウス）を実施した。

2004（平成16）年度 校長に島田正敏が就任した。全学年でT・T教育（算数）を実施した。第2回アメリカン・キャンプが行われた。第2回タイ訪問団がティワタ村を訪ね交流した。関東学院の小学生、中学生、高校生、大学生、卒業生など総勢24名が参加した。

教頭の田上雅章先生が逝去された。先生は六浦小学校のために40年間全力で奉仕をしてくださった。12月18日「田上先生お別れの会」が礼拝堂で行われた。

2005（平成17）年度 本校礼拝堂とチェンマイのバプテスト同盟本部を結び、同時中継で子ども達が交流した。毎日新聞全国版で報道された。毎日小学生新聞にも載った。

本校では、キリスト教の精神、価値観を教育の基礎として、社会、学校、友人等の関係において、正しい理解と協同の心を持った児童の育成。また、児童一人一人かけがえのない人であり、時代が変わっても隣人への思いやり、奉仕する姿勢を持つ児童を育成したいと願っている。



関東学院小学校の歩み

関東学院小学校校長

清水 元

1. 三春台分教室開設

1949（昭和24）年、戦災によって六浦の新キャンパスに移転した関東学院中学校及び、そこで発足した新制高校が三春台校地に復帰しました。それに伴い、三春台校地にも小学校を設立し、キリスト教に基づく小・中・高校の一貫教育を行おうと、1952（昭和27）年4月、現在の地に関東学院小学校三春台分教室が開設されました。

小学校校長は坂田祐学院長が兼務。主事として中学校美術科教諭水船六洲が任命され、分教室の開設、運営の一切を直接担当することになりました。

当初、学校規模は、1学年1クラスとし、1クラスの定員を36名と定め、施設の関係で、初年度は1・2年生のみを公募し1年生36名、2年生22名で始められました。

分教室開設初めの入学式は4月5日、当時の高等學校小講堂で、1・2年生の全児童58名と、学院長坂田祐、中高校長清水武、同副校長山本太郎、同若崎重富教諭、小学校主事水船六洲、友井栄子、鈴木英子、金子悦子の3教諭出席で執り行われました。

分教室の施設は、戦後急造された中学の木造普通教室2棟が当てられ、校庭は一部にまだ戦災で焼失した旧校舎の基礎コンクリート部分を残している1700m²ばかりのものでした。しかし、彫刻家として広く名を為した水船主事自ら金槌・鋸を持ち、ペンキを塗り与えられた施設の改造に当たったのでした。運動場の周囲には木製の白い柵をめぐらし、次第に小学校として独特の雰囲気を作っていました。



「白い柵」のある木造校舎

草創期

教育内容についても、少数教育の利点を生かし一人一人を大切に、個性をゆたかに育むべく多彩な教育活動を行なったのです。毎朝行った礼拝。夏休みに一週間校庭で開いた「緑の学校」。全児童参加の絵画・工芸作品の総合的「展覧会」、児童全員の自由詩を編集した詩集「白い柵」。児童と保護者が一緒になって行うクリスマス礼拝と祝会等々、初年度に次々と特色ある教育活動を企画し実践してきました。これらを可能にしたのは活動の全てに中学、高校からの惜しみない援助があったからです。礼拝は中高の校長、副校长をはじめ数名の教師が交代で受け持ち、体育、理科、聖書、美術、書道、英語等の教科も中高専科教師のバックアップで豊かな内容の教育が推進されました。

最初の1年間の教育実践は日を経ずして認められるところとなり、翌1953（昭和28）年度の入学募集では、36名定員に対して135名もの応募があったのでした。この結果、72名を合格とし53年度の1年生についてのみ急遽2クラス編成としました。



「白い柵」と坂田、水船先生に見送られる生徒

2. 小学校として独立

この年1953（昭和28）年3月六浦校地に置かれていた中・高校が独立し、関東学院六浦中学・高等学校となり、小学校も六浦小学校となったので三春台分教室は独立し『関東学院小学校』と称したのです。

その後、毎年木造校舎を改築増築し、全校6学年生が揃うまで教室、講堂（礼拝堂）、特別教室の拡充を図ってきました。

さて、草創期の小学校にとって大きな力は中学高校の理解と協力でしたが、加えて保護者の信頼と絶大な協力がありました。日常の授業や次々と企画される特別行事一つ一つに、労力と資金を惜しみなく提供してくれた協力者『関東学院小学校父母の会』があつて初めてできた事でした。

このような外からの協力に対して、小学校内では『関東学院小学校子供の座研究会』が結成され、教育の問題を考える場が作られました。ここでは、



'白い柵」「道標」など文集



水船先生デザインの教科別ノート

教職員全員が視点を子供の座に置いて把え、日常の様々な問題を子供の立場から研究していくこうとするものでした。各クラスの問題も全教職員の問題として受けとめ、学院の特別な小学校教育を確立する場を備えたのです。その後、小学校の教育活動は全てこの場を通して練り上げられたと言えるのです。「サービス・グループ」(日直・係り)、「緑の勉強室」・「グリーン・チャンネル」(夏休みワーク帳)、「子供ライブラリー」(図書館)、「一斉テスト」(学力テスト)、「ぶどうの木子ども会」(クラブ)、「秋の屋外なかよし会」(運動会)、「緑の学校」(後の校外宿泊学校)、「夏・冬のはげみ会」(夏・冬期休暇の補習授業)等々、いずれも今日まで受け継がれている独自の教育活動です。

秋の屋外なかよし会
参加記念メダル

3. 学校規模拡大から充実

1965（昭和40）年度より関東学院葉山小学校を吸収合併することになり、急遽木造校舎の一部を取り壊し、鉄筋コンクリート3階の校舎を建築しました。そして1学年2クラス制が整い、教職員の数も22名を超えて今までのほぼ2倍となりました。このスタッフによって大規模拡大に伴う従来の軌道の

修正と再組織化がはじめられることとなりました。

「虹の会」・「鶴の会」・「桃の会」・「文化教室」の新企画によるこどもライブラリー活動の強化。「6年生算数のグループ別」指導。「葉山生活学校」(4・10月2回の宿泊学校)。低学年「らいふ」(現在の生活科に当たる)の新設と高学年社会・理科の強化。子供の座編集の「こどもさんびか」。従来の「私のはげみ」(教科成績の記録)と対になる「私の旗」(行動の記録)。その他数々の教育活動の新しい工夫全てが「子供の座研究会」の場で話し合われ実施されていました。

教育環境を更に充実させるために残る木造校舎部の改築を計画しました。鉄筋コンクリート4層で特別教室・児童用脱靴室、通用口・ボイラー室等。これにより従来の教室棟と棟続きになり児童の教室移動も効率よくなつたのです。1972（昭和47）年1月27日創立記念日に献堂式が行われました。

小学校最後の木造建造物礼拝堂の老朽化が烈しくなったため、1980（昭和55）年運動場西端に1階に体育館、2階に礼拝堂を持つ鉄筋コンクリートを建てました。これにより、小学校は内も外も一応のかたちを整えたと言えるのです。

1982（昭和57）年関東学院小学校創立30周年を、1992（平成4）年には創立40周年の記念式及び記念行事を実施しました。この間に、阪神淡路大震災が生じたことから、充分な耐震を考えて児童が多くの時を過ごす教室棟を改築しました。1998（平成10）年、地上4層12教室、それに特別教室を5室。各階にアルコープ、更に屋上にはプールを備え今まで以上に充実した施設となつたのです。

多くの先達による知恵と献身的なお働きによって小学校のいまが在ることを想います。歴代の校長、教職員は勿論のこと保護者、卒業生、学院法人、そして関東学院中学校高校等、関わり下さったみなさまに感謝の念を厚く致します。

資料・『関東学院百年史』923頁以下参照



小学校校舎全景

1980年代

紫苑学園・啓佑学園の思い出

葉山の学園生活

(紫苑学園・啓佑学園から関東学院六浦小学校)

鎮目 悠三

1944（昭和19）年神奈川県葉山町生まれの僕は1949（昭和24）年春、同町堀内にあった紫苑学園幼稚部に入園した。校舎は旧村井別荘を借り上げた建物で、3階建ての落ち着いた雰囲気の洋館で広々とした敷地の中心にあり、校門の坂上のロータリー、用具庫、砂場、運動場、隣家境界の竹林や脇の土手は四季の草花が咲き、僕たち悪童の格好の遊び場だった。

入園後しばらくは毎朝祖母に連れられて京急のバスで通園していたが、慣れてくると鬱陶しくなり家族の心配をよそに5月連休後は一人で通園するようになった。森戸神社か森戸海岸のバス停で下車、徒歩で学園に向かうのであるが探検宜しく学園隣家の垣根を越え、竹林を登るのは日常茶飯で行きかえりに道草を友達と楽しんだ。

当時敗戦後4年を経ていたが世情はまだまだ混乱期で今のように物があふれる時代ではなかったが両親のお蔭で不自由を感じなかった。葉山の町は御用邸前で山廻りと海岸廻りの道路が交差して逗子方面と横須賀方面に分けていた。道路事情も混雑はなくみすぼらしい払い下げの京急バスを追い越して行くのはいつも進駐軍関係の高級車だった。父が印刷会社を経営していた関係で雑誌に掲載されていた車の写真に驚喜していた頃で、リンカーン、パッカードの高級車から、ダッジ、シボレー、フォードのアメリカ車、ヒルマン、オースチン等のイギリス車に目を見張ったものだった。



啓佑学園開校記念日
前列左端男性：米村義雄先生

1952（昭和27）年11月3日

2年後の1951（昭和26）年春、同期7名と共に卒園、続いて小学部に入り2歳下の弟も入園した。校長は光永貞夫先生でいつもニコニコされてオルガンを弾いていた姿を思い出す。

翌年の1952（昭和27）年11月には啓佑学園と改称し組織変更が行われ更に新旧の教職員の移動があった。理想的な教育は必ずしも経営的にはうまく運営出来なかつたようだ。生徒数も中学部が併設されたにも関わらず、少人数化に歯止めはかからず僕の同期は遂に3名となった。名称は変わったものの学園生活は楽しく、新たに加わった中学生の兄さんや姉さん達を交え春秋の運動会、講師の先生によるホッケー、ゴルフ、サッカー、クリスマスのミサやプロ演奏家によるコンサート、外国人による英語レッスン、夏のキャンプ等多彩な行事が開催された。



ホッケー
1952（昭和27）年9月初め

しかしあまりの少人数の教育環境を心配した両親は、僕達兄弟を1954（昭和29）年秋に関東学院六浦小学校に編入受験させて転校させた。

葉山での学園生活にはピリオドを打つ事になったが、古いアルバムを見ていると懐かしい昔の風景がいまだに鮮烈な印象としておもいださせる。

幸いにして三人の子に恵まれそれぞれ二人の子がいるので六人の孫もちである。近々引退をしたら思い出深い葉山の生家に最愛の妻と暮らす計画である。



4年生の時 同期3人と
(手前中央鎮目氏)
1954（昭和29）年4月

鎮目 悠三 (しづめ ゆうぞう)

1944(昭和19)年11月20日 三浦郡葉山生まれ。
1949(昭和24)年4月 紫苑学園幼稚部入園。
1951(昭和26)年4月 紫苑学園小学部入学。
1954(昭和29)年11月 啓佑学園から関東学院六浦小学校編入学。
1959(昭和34)年3月 関東学院六浦中学校卒。
1967(昭和42)年3月 日本大学文理学部心理学科卒。
1971(昭和46)年3月 家業踏襲現在に至る。

関東学院葉山小学校の思い出

葉山小学校は大きな懐

井上由宇志

私が関東学院葉山小学校に通っていたのは、今を遡ること40年になる。しかも私が在籍したのは、葉山小学校が三春台と六浦小学校に分割統合される前年の、1964（昭和39）年（東京オリンピックの年）の一年間だけという、本当に短い間であった。遠い昔のそして小学2年生という幼い時期のことであるのに、私には葉山小学校の鮮明な印象がいくつかある。

葉山小学校は自然の中にあり、校舎も自然と一体化したかのような、優しさの中にも威厳のある建物だった。

一学年1クラス。各学年は20人位だったと思う。

今でこそ落ち着いてきている私も、当時はやんちゃ盛りの小学2年生。家の事情で地元鶴見の小学校から転校、家も弘明寺に移ったが、それでも片道1時間ほどをかけて通学していた。なんでも、私の祖父と当時の葉山小学校長の米村先生が古くからの知り合いであったらしい。

米村先生とは忘れられないことがある。達筆であった米村先生に祖父が表札を書いてもらうことになり私がその板を届けたのであるが、まだ校内もよく分からぬときで、クラスの女子（確か岡崎さんと言ったと思う）が親切に校長室まで案内してくれた。私は校長室に入るやいなやその表札用の板を突き出し、「これ！」と一言だけ言った。その後の全校礼拝の席で米村先生はこのときの状況を話したが、その時案内してくれた女子が私の肩をついて笑っていたのである。多分にこれは戒めの話してあったのだろう。しかし自分としてはあまり恥じをかいた印象はなかった。きっと、米村先生が私を慮りながら話していたのだと記憶している。

また、葉山小学校では一つ上の学年の者が下の学年の面倒を見るようになっていた。クラス礼拝のときには3年生が来て私たちを静かにさせたり、聖書の箇所を教えたりしていたと思う。

お祈りの時には目をつぶって静かにしているが、ある日私は先輩たちがその間何をしているのか、どうしても見たい衝動に駆られ、そおっと薄目を開いてみた。その途端「井上君、今、薄目を開けたでしょう！」と鋭い声が飛んできた。私はびっくりして固く目を閉じたが、時既に遅し。その後大きな札を首から下げて中庭に立っていなければ

ならなかつたのである。一体、あの札には何が書いてあったのだろうか…！厳しい言葉が書かれていたことは間違いないだろう。

それにしても、あの時の先輩の鋭いタイミングはなんとすばらしいことか！しかも私はかなり後ろの席で、先輩とはずいぶんと離れていたと思うのであるが。使命感に溢れた上級生の姿が目に浮かぶのである。

そして葉山といえば海である。理科の時間には「実習」という名目で森戸海岸に下りていった。磯の生き物を観察するのである。実に楽しかった。磯の生き物たちは小学2年生の私たちにとって、それはそれは興味深い生き物たちである。ウミウシ、アメフラン、イソギンチャク。私が一番驚いたのは巨大なヤドカリ。まさかと思われるだろうが、私にはその大きなヤドカリが忘れないものである。自分が小さかったということもあると思うが、当時の森戸海岸は生き物ものびのびとしていたのではないだろうか。海岸への道すがら、無数の陸蟹（これもかなり大きい！）とも遭遇して、捕まえようとしては挟まれていたものである。

また、思い出すのは逗子海岸駅（現在の京浜急行新逗子駅）の駅員さんである。私はその日、理科（？）の先生が何かの薬品二種類を水に入れると見事に赤くなる、という実験を授業で見て、とても印象深かったのだろう、帰りの駅で駅員さんにバケツに水を持って来させ、その実験をして見せたのである。赤く変わった瞬間、自慢げに呼吸をしていたように思う。なぜ薬品を持って帰れたのか、何の薬品だったのかよく覚えていないが、その駅員さんは一緒に付き合ってくれたわけである。昼下がりの駅での赤い水と駅員さんの優しさが、柔らかい日差しと共に鮮やかに心に残っている。

断片的な記憶ばかりだが、葉山小学校で過ごした一年間は私にとってかけがえのない“時”であった。その後三春台に通ったわけだが、こじんまりといながらも中身は大きく暖かい“懐”を思わせる葉山小学校の思い出はこれからも生涯、大事にして行きたい。

井上由宇志（いのうえゆうじ）

1956（昭和31）年生まれ。

1964（昭和39）関東学院葉山小学校に転入。

その後、関東学院小・中・高校を経て明治大学法学部卒業。

1979（昭和54）年丸全昭和運輸（株）入社。

2004（平成16）年同社アメリカ・ロサンゼルス現地法人

マルゼン・オブ・アメリカ駐在 現在に至る。

各小学校略年表

●建物等の名称は当時のまま。
●記載事項は各校記念誌等に拠る。(表中の備考欄に記載)

年月日	ことがら			備考
	六浦小学校	小学校	葉山小学校(紫苑学園、啓佑学園を含む)	
1949年3月 (昭和24)	関東学院小学校の設立認可。(六浦校地)		(1948 (昭和23) 年紫苑学園創設)	(大学30年史) 目で見る40年の歩み 関東学院百年史
1949年4月 (昭和24)	大学内にて授業をはじめる。			目で見る40年の歩み 関東学院百年史
1952年1月 (昭和27)	中高(六浦)校舎に移転、3月まで同所で授業をする			目で見る40年の歩み 関東学院百年史
1952年4月 (昭和27)	青雲寮に移転、1958年3月まで同所で授業をする。	関東学院小学校三春台分教室開設。	(この年の11月に紫苑学園を啓佑学園と改称する)	関東学院小学校の40年 関東学院百年史 (大学30年史)
1953年3月 (昭和28)	六浦校地の本校は関東学院六浦小学校と改称する	関東学院小学校三春台分教室から関東学院小学校として独立する。		関東学院小学校の40年 関東学院百年史
1953年6月 (昭和28)		教員室・事務室・用務員室を増築。(木造2階建1棟増築)		関東学院小学校の40年 関東学院百年史
1954年4月 (昭和29)	礼拝堂・図書館が完成。			目で見る40年の歩み 関東学院百年史
1955年3月 (昭和30)		理科室・音楽室建設。教員室拡張工事着工。		関東学院小学校の40年
1956年10月1日 (昭和31)			啓佑学園を合併し、関東学院葉山小学校が発足する。	大学30年史 坂田記念館資料
1956年6月15日 (昭和31)		ぶどうの木子供会発足。		関東学院小学校の40年 関東学院百年史
1958年4月19日 (昭和33)		同窓会「たんぽぽの会」結成。		関東学院小学校の40年 関東学院百年史
1958年6月 (昭和33)	2・3号館(教室・職員室)の献堂式。			目で見る40年の歩み
1959年11月 (昭和34)	現校地に礼拝堂(体育室)・図書館が移転する。			目で見る40年の歩み
1960年 (昭和35)			教室棟の増築を行う。	関東学院百年史
1962年11月 (昭和37)	同窓会「シオン会」結成。			関東学院百年史
1963年10月 (昭和38)	本館(1号館、管理室・特別教室)が竣工。			目で見る40年の歩み 関東学院百年史
1963年11月 (昭和38)	本館落成記念式典、披露祝賀会、劇と音楽の会を催す。			目で見る40年の歩み
1964年5月 (昭和39)	創立15周年記念式を行なう。			目で見る40年の歩み 関東学院百年史
1965年2月 (昭和40)		新校舎献堂式。授業開始。		関東学院小学校の40年 関東学院百年史
1965年 (昭和40)	葉山小学校が閉校し、在校生は小学校(三春台)と六浦小学校に移動する。			目で見る40年の歩み 関東学院百年史
1972年1月 (昭和47)		新校舎増築部分の献堂式。		関東学院小学校の40年 関東学院百年史
1972年7月 (昭和47)		運動場整備終了。(7月24日運動場にて披露パーティを行う)		関東学院小学校の40年 関東学院百年史
1972年9月27日 (昭和47)		運動場で、創立20周年を記念する「秋の屋外なかよし会」を挙行。		関東学院小学校の40年 関東学院百年史
1977年5月 (昭和52)	運動場南側にプレハブ校舎が完成。旧校舎が取り壊され、新校舎の工事が始まる。			目で見る40年の歩み
1978年4月 (昭和53)	鉄筋コンクリート造4階建(教員室、教室、音楽室、図書室、放送室、保健室、面接室、準備室)の2号館が竣工。			目で見る40年の歩み 関東学院百年史
1978年5月 (昭和53)	2号館落成記念式典、披露祝賀パーティーを催す。			目で見る40年の歩み
1979年7月31日 (昭和54)		木造礼拝堂解体。		目で見る40年の歩み 関東学院百年史
1979年10月 (昭和54)	創立30周年記念式典を六浦中高の礼拝堂で行なう。			目で見る40年の歩み 関東学院百年史
1979年11月16日 (昭和54)		礼拝堂・体育館新築定礎式。		関東学院小学校の40年 関東学院百年史
1980年11月21日 (昭和55)		礼拝堂・体育館新築献堂式。		関東学院百年史
1982年8月 (昭和57)	礼拝堂と図工室が新しくなる。			目で見る40年の歩み
1982年11月 (昭和57)		創立30周年式典挙行。		関東学院小学校の40年 関東学院百年史
1989年4月 (平成元)	新しい制服ができる。			目で見る40年の歩み
1991年2月16日 (平成3)	創立40周年記念体育館・礼拝堂献堂式			関東学院広報
1992年10月 (平成4)		創立40周年記念行事を行う。		関東学院小学校の40年
1992年10月31日 (平成4)		創立40周年記念礼拝(於:中高大講堂)		関東学院広報
1994年1月8日 (平成6)		玄関(昇降口)増築工事竣工式		関東学院広報
1997年8月25日 (平成9)		校舎献堂式		関東学院広報
1999年8月27日 (平成11)	1号館献堂式			関東学院広報
2000年2月26日 (平成12)	六浦小学校創立50周年記念式典			関東学院広報
2002年10月26日 (平成14)		50周年記念オリーブ祭		関東学院広報

学院史資料の紹介

経済学部教授・学院宗教主任 高野 進

■町田四郎著『坂田祐先生を語る』

発行 関東学院 1992(平成4)年

本書では、坂田祐先生について、私たちが余り知らないことなどを、町田氏が書き残して下さっている。それをお紹介したい。晩年、坂田祐先生は雑誌『待晨』に自伝を執筆された。それを集大成したものが『恩寵の生涯』である。初版は1966年である。その10年後、1976年に改定・増補版が出された。先生は1969年に天に召されているので、これは死後出版である。

初版が出版された時、『週刊朝日』が書評欄に取り上げてくれている。「この本は『剛毅な明治のキリスト者の自伝である。しかし、いわゆる臭味は、全く感じられない。むしろ、武士道的なるものを残していた剛毅で謙譲な一明治人の記録として、とくに、青年たちに興味と感動を与えるはずの伝記である』といっています。」町田氏はこれを引用した後「全く同感に存じます」と感想を述べておられる。確かに、そのとおりである。

町田氏は坂田祐先生ご自身が生涯を4区分されていたという。「10代は子供時代と鉱山労働者時代、20代は軍隊生活、30代は学生時代、40代以降は学校教師、校長時代であった。」40代以降が長いが、これを関東学院時代と見るわけである。

第一高等学校時代からの友人に山本有三氏がおられた。その山本有三氏が関東学院高等学校で講演された。町田氏は当時の学生が受け止めた講演内容を引用している。

「私は先生のお話を身近にきき感銘しました。山本先生は、11月3日を文化の日と制定された経緯を話され、『今後、文化国家を目指してゆく日本にとっては、従来のように文化を、歴史的遺物遺蹟を大切にするというような受動的なものと受取らずに、自ら汗を流して一歩一歩築いてゆく行動的、建設的文化資産大事にすることと理解して欲しい。諸君たち若い人、一人ひとりが新しい日本の文化を耕す人になつて貰いたい』と訴えられた」という。戦後の新しい

文化建設の意気込みが山本有三氏に見られた。坂田祐先生もこの意気込みをもって戦後の教育に当たられたわけである。

町田氏は坂田祐先生が「終生、バプテスト教会員でありました」と指摘している。内村鑑三氏の弟子でもあった先生は、無教会について、次のように記しているという。これは先生の立場をよく言い表わしている。

「自分は無教会を主張される内村先生の弟子として30年も教えを受けてきたが、無教会信者にはならなかった。実は、私にとって、教会・無教会は、信仰に関連するが、その根本の問題ではない。教会でなければ、とか、あるいは、無教会でなければ救われない、とは考えない。教会可なり、無教会可なり、である。福音の根本に關係のない問題に青筋を立てて罵りあうなどは實にみっともない。」

町田氏は先生の人柄についてこう記す。リーダーの条件として私たちも学び取りたいものである。「先生には剛さとともに、人の立場を考える優しさがあり、巾広い交わりを持ち、人を包容し、引きつけるものがありました。この大らかさが、大勢の人の中心になり『長』として活動された所以かと思います。」

先生の1周年記念追悼会に、一高時代の同級生だった南原繁先生が「自分たちは、新渡戸稻造校長から“何かをしようとする前に何であらねばならぬかを考えよ。to do の前に to be がある、と教えられた”と話された」という。ここから町田氏は校訓についてコメントする。「『人になれ、奉仕せよ』もこの流れの表現であります。to be が観念的には先であり、大切であるが、実は to do も離せられない。『徳は奉仕によって磨かれる』とか『奉仕することによって人になれ』という坂田先生の言葉が、to be と to do が離すべからざることになっております。実際の教育はこうあって欲しい、と先生は常づね、考えておられたのだと思います。」

執筆者の町田四郎氏は、中学関東学院の第1回卒業生であった。先生を終生敬愛してやまなかつたお方であった。



坂田祐先生と著者の町田四郎氏



□「関東学院軽井沢山荘」



1962（昭和37）年、軽井沢町大字発地字大原1061番31（6,675平方メートル）を購入し、軽井沢校地とした。1962（昭和37）年から1967（昭和42）年にかけて山荘3棟、住宅1棟、浴室や渡り廊下等を建てた。ⁱ

「軽井沢山荘」は学院各校が夏期の研修会や合宿で利用した。右下の写真は神学部の研修会で利用したときに撮影された。1965（昭和40）年頃のもので、讃美歌を歌っている様子がわかる。写真右端（左向き）の人物は中居京先生、中居先生の左奥で腰に手をあてている人物は坂田祐先生。（ちなみに歌っている学生の中に当時神学部生だった当学院史資料室の三浦啓治がいます。）

『kanto olive』第2号（1967（昭和42）年5月10日発行）に、「関東学院軽井沢山荘とはこんな処です」（岡沢貞行）という記事があり、軽井沢山荘周辺のことを知ることができる。また、宿泊費（1泊）は750円、利用可能期間は5月～8月だったことも記載されている。『新編 恩寵の生涯』ⁱⁱにも軽井沢山荘の記述があり、坂田祐御

夫妻が毎年夏に同所で過ごされたことについても触れられている。

1974（昭和49）年頃から次第に利用されなくなり、1983（昭和58）年には全建物を解体撤去し、現在に至っている。



i 『関東学院百年史』529頁。

ii 『新編 恩寵の生涯』472、473頁。著者は坂田祐。1976（昭和51）年8月10日待晨堂発行。

資料・情報提供のお願い

学院史資料室は学院に関する資料の収集をしています。

各学校、各部署等で発行されました刊行物は一部、学院史資料室にご寄贈くださいますようお願いいたします。また、各所で作成されたのち、既に保存期間を超えたか、不要になっている過去の書類、機器・備品、写真などにつきましても、情報を提供していただけますようご協力をお願いいたします。

<関東学院葉山小学校について>

葉山小学校の校章や記念品などの物品、また、写真などをお持ちの方がいらっしゃいましたら、学院史資料室までご連絡いただけますようお願いいたします。また、葉山小学校に在学・在職されていた方をご存知でしたらご紹介いただけますよう併せてお願いいたします。(当時の様子を聞き取り、記録したいと考えております。)

<軽井沢山荘について>

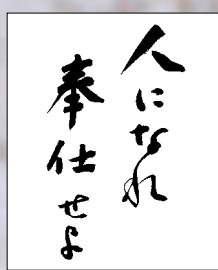
軽井沢山荘の写真を探しております。

軽井沢山荘の外観や中の様子が写っているものをお持ちの方がいらっしゃいましたら、学院史資料室までご連絡いただけますようご協力をお願いいたします。(写真は人物等他のものが写っていても構いません。ご提供いただいた写真は後日返却いたします。)

<中桐寮について(継続)>

引き続き中桐寮の写真を探しております。

中桐寮の外観や中の様子が写っているものをお持ちの方がいらっしゃいましたら、学院史資料室までご連絡いただけますようご協力をお願いいたします。(写真は人物等他のものが写っていても構いません。ご提供いただいた写真は後日返却いたします。)



編集後記

小学校の歴史を見ると、1948（昭和23）年設立された関東学院教会幼稚園の卒業園児の父母からの強い要望により卒園生を受け入れるために1949（昭和24）年に誕生した。開設当時は木造の1教室から始まり施設的には恵まれていないが、キリスト教精神に基づいた教育を受けさせたいという父母と、それを受けて教職員が情熱を持って教育に打ち込み、満足度の高い卒業生を送り出したことにより、今日の発展があると思われる。(三浦)

今号は学院内の小学校を取り上げましたが、中でも葉山小学校、そしてその前身校の紫苑学園・啓佑学園に在学された方の手記を載せることができたことは大きな喜びです。「関東学院百年史」など既存の記念誌を開けば創設や変遷の概略を知ることはできますが、当時どのような学校生活が送られていたのか、ということまではわかりませんでした。今回、お二人からの手記のほか鎮目氏からは写真までご提供いただき、当時の情景を知ることができました。最後になりましたが、ご協力いただいた方々にこの場をお借りして御礼申し上げます。(菊池)

関東学院 校訓

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第8号

発行日 2006(平成18)年6月22日

発行人 関東学院 学院長 松本昌子

編集 関東学院 学院史資料室

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL. 045-786-7066 FAX. 045-786-2479

環境に配慮して



古紙配合率100%再生紙を使用しています
2006.6.22.2000